

平成一三年度早稲田大学史学会
公開シンポジウム

近代に創られた「古代」

総合司会 日本史学専修 大日方純夫
趣旨説明 東洋史学専修 李 成 市

われわれは、現在と古代の間に遙かな時間的距離があるにもかかわらず、心理的にはその懸隔は消去され、あるいは無視され、あたかも昨日のことのように古代の出来事を語り合う。古代エジプト、ギリシア、ローマはすっかり慣れ親しんだ隣人となっている。

この日本でも、政治史における大化改新、外交史における遣隋使・遣唐使、文化史における万葉集・正倉院宝物などは、今日では小学生の時から接する題材であるが、近世までの人々が全く知りえない対象であり、関心にのぼることすらありえなかった。にもかかわらず、それらはいかな

る過程を経て、国民規模で知らなければならぬ常識になるに至ったのだろうか。このたびのシンポジウムにおいて新川登亀男氏の問題提起と高木博志氏のコメントは、このような問いに深く関わっている。

近代日本におけるこうした過程は、欧米列強諸国との接触が大きな契機になっているのだが、ヨーロッパにおいても古代は決して身近な存在ではなかった。たとえば、ロンドンのテート・ブリテンにあるフラス・タウンが描いたローマのコロッセオ（一七八〇年）は、土砂と樹木に覆われていて、その外観をとらえることすら困難である。あたかもギボンの『ローマ帝国衰亡史』第一巻が刊行されて四年後の景観であるが、今日の私たちが目にするコロッセオはそこにはない。

ヨーロッパにおいて古代が認識の対象として成立するのは、一四世紀以降のことであり、その過程も単純ではない。たとえば、エジプト学の場合は、聖書学との関わりのおかげで問題にされた。古い歴史を誇る

エジプト史を、旧約聖書が示す歴史的枠組にうまくおさめ、聖書こそ人類の歴史を包摂した普遍史であることを明らかにするねらいがこめられていた。アッシリア学もまた、古代ギリシア人やローマ人が信じていたアッシリアと、聖書に出てくるアッシリアとをいかに整合的に位置づけるかに関わっていた。近藤二郎氏の問題提起と前田徹氏のコメントは、古代エジプトやアッシリアがどのような過程でヨーロッパ人の認識対象になりえたのかという問題に言及されるはずである。

ところで、こうした聖書の記述に基づくキリスト教世界Ⅱ普遍史の世俗化が進行する過程において、まさに近代国家は誕生するのであるが、近代国家はおしなべて民族の起源、国家の起源を問題にし、そのようにして古代が重要な関心事となった。世俗化の帰結として古代が近代国家にとってきわめて重要な認識対象となったといえる。軽視できないのは、近代にいたり時を越えた国民的同一性や文化的アイデンティ

ティが国家によって古代に求められたという事実である。昨年の早稲田大学史学会では、近代史学の成立を共同討議したが、それをふまえつつ、近代歴史学が古代を発見し、創造していく過程を多面的に議論し、引き続き共有すべき論点をさらに掘りさげてみたい。

報告

古代オリエント史と旧約聖書

ーエジプト学を中心としてー

考古学専修 近 藤 二 郎

西洋古代史が、ギリシア史以前に古代オリエント史を位置付けている経緯について考える。西洋世界におけるオリエント世界の捉え方の変遷を概観する。また、古代オリエント史と旧約聖書との関係についても説明を加えていく。

先ず西洋世界における「エジプト」認識の変遷を歴史的に捉え、今日のエジプト学

がどのようにして形成されていったのかを考察する。さらに、古代オリエント史と旧約聖書の関係をエジプト学の歴史を通して位置付ける。

ギリシア以前の地中海世界とエジプトとの関係は、先史時代にまで溯ることができ。キクラデス諸島産の金剛砂が、紀元前四〇〇〇紀後半にエジプトにもたらされている。また、東デルタのテル・アル・ダバア遺跡の紀元前一六世紀の層から「牛跳び」のフレスコ画の断片が出土しており、当時のクレタ島との密接な関係が想起される。

その他、新王国時代のエジプトへの朝貢図やエジプト出土のミケーネ土器、「海の民」の活動等が存在していた。

こうした歴史的出来事を題材として成立したホメロスの叙事詩で描かれている世界では、エジプトは常に神秘の国として登場している。

旧約聖書のモーセ五書の中で、創世記、出エジプト記の二書に、さらに列王記、歴

代誌、エレミヤ書、ナホム書等にエジプトに関する記述が登場しており、イスラエルとエジプトとの関係の深さを表している。

古典古代の作品に現れるエジプトも重要な資料である。紀元前七世紀に、ギリシア人が初めてエジプトを訪れて以来、古典古代の作家により多くの作品が書かれた。それらの作品に描かれた「古代エジプト」は末期王朝（第二六王朝）時代からビザンツ時代までのエジプト史の最終段階にある芸術・宗教・社会・技術・数学・天文学・建築等であり、これらの情報も当然のことながら作家たちのバイアスのかかったギリシア・ローマ文化のフィルターを通して見たものである。代表作品としては、ヘロドトスの『歴史』、マネトの『エジプト史』、ディオドロス・シクルスの『歴史叢書』、ストラボンの『地理書』そして、プルタルコス『対比列伝』等が知られる。

しかしながら、六四一年にアラブ遠征軍がエジプトを征服すると、エジプトはビザンツ世界や地中海世界から隔絶した存在と